



TITLE:

日本經濟と南洋貿易 (特輯 南方經濟號)

AUTHOR(S):

松井, 清

CITATION:

松井, 清. 日本經濟と南洋貿易 (特輯 南方經濟號). 東亞經濟論叢 1942, 2(1): 229-260

ISSUE DATE:

1942-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/128690>

RIGHT:

所究研濟經亞東 學大部國帝都京經

年四回(二月、五月、八月、十一月)發行

叢論濟經亞東

號壹第 卷貳第
月三年七十和昭

特輯 南方經濟號

南方經濟の基本問題……………	經濟學博士	谷口吉彦
最近佛領印度支那幣制に於ける二つの改革……………	經濟學博士	松岡孝兒
比島資源價値の進展……………	經濟學士	淺香末起
ビルマの資源と産業と貿易……………	……………	大場忠
インドの農産資源……………	文學士	岡崎三郎
濠洲經濟事情……………	……………	宮崎亮
農業投資植民地としての蘭領インド……………	經濟學士	北博
印度支那 ^{ける} におフランスの經濟政策……………	經濟學士	河野健二
日本經濟と南洋貿易……………	經濟學士	松井清
南方纖維原料の生産について……………	經濟學士	岡部利良
南方ゴム資源と其の對策……………	經濟學博士	谷口吉彦
南方資源論……………	經濟學博士	蜷川虎三

附錄 南方文獻目錄

賣發閣斐有肆書

日本經濟と南洋貿易

松 井 清

目次	一 確立期	二 展開期	三 世界恐慌とその回復期	四 戦時經濟期
----	-------	-------	--------------	---------

一 確立期

こゝでは南洋貿易研究の序説的な課題として、日本經濟がその確立以來南洋貿易を如何なる意味に於て、また如何なる形に於て必要としたかが、主として貿易統計に現はれた面を中心としてとり上げられる。日本の對南洋貿易が日本經濟のみから理解されうるものでなく、南洋經濟そのものについての正確な知識を必要とすることは言ふまでもないことであるが、しかもこゝで日本經濟の構造から南洋貿易がとり上げられるのは、何よりも先づ問題が日本の立場に於て把へられるのでなければ無意味であると云ふ最も根本的な方法的要請によるのである。今後豫定されてゐる南洋經濟の調査は、かゝる主體的な立場とその立場から規定される目的意識からの不可分離的な制約を受けることは明らかであると考へられ、さうした理由から問題は先づ日本經濟の構造的性格から出發する。従つてこのことは國際貿易が一方に於て國民經濟の内部的要因によつて制約されると共に、他方に於て世

界經濟からの外部的な制約を受けるとの認識を妨げるものではなく、むしろそれを豫定するものである。

總じて國民經濟は生産手段生産部門と消費資料生産部門の總體に於ける再生産の過程として最も科學的に把握することができ、その具體的檢出のうちに構造的な性格が明確にされうるのであるが、此所で與へられる日本經濟の規定もまたさう云つた方法の上に立つてゐる。日本經濟は江戸時代に於ける封建的農業を完全に資本主義化する事なく、それを新に再編成し、それを基礎としつゝ、その上に近代産業の移植が企てられると云ふ形をとつたため、最初より國內市場の狹隘と従つて外國貿易依存と云ふ性格を持つてゐた。而も先進諸外國が既に獨占資本主義の段階に到達した時に始めて國際社會に参加したその極度の後進性は、完全な關稅自主權なくして産業革命を推行しなければならぬと云ふ極めて特殊の事實となつて現はれ、英國が自由貿易的政策の下に、獨逸がリートの保護關稅の下に推行したところのものを、わが國は軍備力そのものによつて行はねばならなかつたのである。軍需産業の移植、軍需資材の輸入のために、消費資料生産部門とりわけ衣料生産部門は必然的に輸出産業として確立せられねばならなかつた。直接農村の勞働力を基礎として副業（織物業）、或ひは間接に農村の生活水準に制約される低勞銀を基礎として、わが絹業及び綿業が從來わが輸出産業の大宗たる役割を果したことは人の知る通りである。しかし同じく輸出産業として確立された衣料生産部門に於ても、絹業と綿業とではその意義がやゝ異なることは注意されなければならぬ。まづ製糸業を主導とする絹業三分化行程は、養蠶から織物に至るまですべて土着産業として確立され、輸入に依存しなかつたと云ふ意味に於ては、絹業こそわが國の外貨獲得に於て最も重大な役割を果したと云ふことが出来る。と同時に最終行程たる絹織物業を除いてその主導者たる製糸業が主

としてアメリカ合衆國の奢侈的需要に依存してゐた點は注目せられる必要がある。即ちこのことはわが國の輸出貿易を、必需品輸出の場合に比して極めて脆弱な基礎の上に立たしめたのである。開國以來そこに濃淡の差はあつたにしても、わが國の生絲貿易は多かれ少なかれ受動的な色彩を持ち續けたのであり、アメリカ合衆國の政策によつて左右せられねばならなかつた。これに對し綿糸紡績業を主導とする綿業三分化行程は異つた意味を持つてゐた。第一にそれは原料の調達に於て最初に支那、次いで英領印度、更らにアメリカ合衆國に依存しなければならなかつた。しかし第二に綿糸紡績業及び綿織物業が後進國たる支那・南洋を目標に確立せられた點に於て、綿業はまた絹業と異つた性格を持つてゐた。即ち生糸貿易の受動的な性格に對し、綿貿易は後進諸國の必需品需要に向けられ、從つて自主的な性格を持つてゐたのである。しかもこの自主的貿易たるや、さきに指摘した如く、英國的自由貿易政策によつてでもなく、また獨逸的保護關稅によつてでもなく、實に關稅自主權なしに行はれた。確立期に於ける綿業關係者の貿易政策的運動が、一般後進國のやうに綿糸布輸入關稅の設定ではなく、反對に棉花輸入關稅・綿糸輸出關稅の徹廢に向けられ、一見自由貿易的な表情を呈しながら、その本質に於て全く別個のものであつたことは銘記せられねばならぬ。このやうな差異を持つにも拘らず、絹業及び綿業が完全に資本主義化してゐない農村を直接或ひは間接の地盤として確立せられたと云ふ點では全く同様であつた。そしてその基礎的規定は絹業及び綿業のほかマツチ工業・陶磁器工業等雜品と總稱せられる輸出貨向中小工業の全般に妥當するものと解されても差支へないやうである。

生絲貿易を中心とする先進歐米諸國との貿易は暫らく別として、明治二十年から三十年にかけての時期を以て

劃される日本經濟確立期に於て最初に問題となつたのは、支那貿易であつた。明治二十七・八年の日清戰爭及び明治三十七・八年の日露戰爭に於けるわが國の勝利は、この方向に於ける日本經濟の發展に對して決定的な意味を持つに至り、わが國消費資料生産部門の製品市場及び生産手段生産部門の原料供給地としての支那は生命線的重要性を持つに至つた。日清戰後に於ける最惠國約款の確約と大冶鐵確保、日露戰後に於ける鞍山鐵の確保を想起せよ。そのやうな意味に於てこの時期に於ける南洋貿易は、支那貿易に對して附隨的な役割しか持たず、香港・新嘉坡等の仲繼貿易港を経て行はれる間接取引多く、支那人商人の手を経るものであつた。明治四十四年に於ける關稅自主權の確立と明治四十五年に於ける南洋直通航路の開設は、既にその後の貿易伸張を豫定するものであつたが、第一次大戰前の南洋貿易は實に微々たるものにすぎなかつた。南洋貿易がわが國貿易年表に現はれたのは、比律賓貿易明治二十年、佛印貿易明治二十七年、蘭印貿易明治三十一年、海峽植民地貿易明治三十五年、英領ボルネオ貿易昭和五年となつてゐるが、その數量が急激に増加したのは何れも第一次世界大戰以後である。明治四十四年臺灣銀行發行の小冊子はその年に至る十年間の南洋貿易に關する調査を行つてゐるが、當時の南洋貿易について次のやうに書いてゐる。『我國の南洋貿易は最近に至りて漸く發達の曙光を認めたるものにして今後の開拓、施設に俟つもの尠なからざるなり……明年度より南洋直援航路の開かるゝあり、又本行は該地方植民及貿易補助機關たるの職責を盡さんとして各種の調査に勉めつゝあるを以て他日貿易補助機關完備するに至らば我が南洋貿易も亦充分の發展を爲し得べきや明かなり。』いま當時に於ける南洋貿易の全般的な數字を示せば次のやうになつてゐる。初期南洋貿易は例外なしに輸入超過であり、而もその差額は何れもかなりの開きを

- 1) 東洋經濟新報社：日本貿易精覽參照。
- 2) 臺灣銀行：我國貿易の大勢並に南洋貿易事情(明治四十四年)。
- 3) 日本貿易精覽及臺灣銀行前掲小冊子より作製。

日本の對南洋輸出（千圓以下切捨）

	佛 印	タイ國	海峽 植民地	蘭 印	比 島	合 計	亞細亞	南亞 %	世 界	南亞 %
明33	千圓 114	35	—	362	1,257	1,768	85,064	2.07	194,476	0.90
明34	148	32	—	683	2,580	3,443	100,104	3.44	240,976	1.42
明35	158	56	8,269	572	1,731	10,786	90,715	11.89	247,748	4.35
明36	197	73	7,108	912	1,675	9,965	115,013	8.66	277,740	3.59
明37	374	159	5,270	1,082	1,675	8,560	114,142	7.50	298,871	2.89
明38	406	103	4,424	1,233	1,363	7,529	136,135	5.53	294,914	2.55
明39	149	235	4,033	1,393	1,375	7,185	172,874	4.16	398,545	1.80
明40	250	338	5,767	2,261	1,795	10,411	158,973	6.55	399,620	2.60
明41	365	2,308	5,944	2,123	2,358	12,498	127,127	9.83	347,972	3.59
明42	439	480	5,661	3,071	3,162	12,813	141,591	9.05	386,114	3.32
明43	341	533	6,549	3,133	4,410	14,966	168,830	8.86	440,978	3.39

日本の對南洋輸入

	佛 印	タイ國	海峽 植民地	蘭 印	比 島	合 計	亞細亞	南亞 %	世 界	南亞 %
明33	千圓 3,632	585	—	7,411	2,284	13,912	83,767	16.60	278,456	4.99
明34	4,082	1,195	—	7,303	2,981	15,561	101,256	15.36	245,764	6.33
明35	5,949	1,695	1,074	6,592	1,493	16,803	115,418	14.55	263,773	6.37
明36	15,579	3,726	1,323	10,842	3,421	34,391	160,253	21.77	308,223	11.32
明37	17,399	5,785	2,725	17,912	2,468	46,289	176,138	26.28	364,959	12.68
明38	10,147	4,586	3,397	14,830	1,367	34,327	181,030	18.96	482,387	7.11
明39	7,505	3,191	2,467	23,519	1,143	37,825	157,631	23.99	410,578	9.21
明40	8,662	2,738	3,062	22,039	2,159	38,660	183,722	21.04	478,095	8.08
明41	8,484	2,687	2,702	23,965	1,623	39,461	154,554	25.53	422,539	9.33
明42	6,372	2,595	2,972	18,631	1,003	31,573	162,640	19.41	380,059	8.30
明43	4,438	2,635	4,615	18,879	788	31,355	217,465	14.41	346,641	9.04

示してゐるが、ともにわが國總貿易額中に於て占むる割合は一割に満たず、微々たるものであると言ふことが出来る。右表中試みに明治四十三年を例にとつてみると、輸出に於てはわが國全亞細亞輸出の八・八六%、全世界輸出の三・三九%、輸入に於てはわが國全亞細亞輸入の一四・四一%、全世界輸入の九・〇四%を占むるにすぎない。更らに同年の支那貿易額と比較すると、對支輸出總額が九〇、〇三七、〇〇〇圓であるに比し、對南洋輸出總額は一四、九六六、〇〇〇圓であり、對支輸入が六八、五六九、〇〇〇圓であるに比し、對南洋輸入は三三、二〇五、〇〇〇圓である。

更らに詳細を知るために明治四十三年を例にとつて各國別の貿易構成に關する統計を掲げよう。¹⁾

日本對佛印主要商品貿易額
(明治四十三年)

輸 出	總額	341.千円
	綿織物	9.0
	絹織物	7.7
	綿メリヤス	17.8
	絹ハンカチ	4.9
	陶磁器	37.2
	ラムブ及同部分品	12.8
	玩具	8.5
	石炭	102.4
	馬鈴薯	11.2
	椎茸	7.4
	錫	8.3
	寒天	8.0
輸 入	總額	4,438.
	米	3,532.
	棉花	534.

わが南洋貿易は最初より完成品輸出・原料品輸入と云ふ工業國對農業國の形態をとつてゐるが、唯この時期に於て目立つところは、第一に未だ輸出品中に海産物(錫・寒天)、農産物(馬鈴薯・葱)、礦産物(石炭)等原始生産物が相當の比重を占めてゐることであり、この事實はわが國に於ける資本主義の確立が多分に舊き要素を含みつゝ行はれたと云ふことから説明されうと考へられる。わが國が本格的な工業化を推し進め

4) 大藏省：大日本外國貿易年表より作製。

日本對蘭印主要商品貿易額
(明治四十三年)

輸 出	總額	3,133.千円
	綿織物	155.
	絹織物	164.
	綿タオル	93.
	綿メリヤス	158.
	陶磁器	79.
	ランプ及同部分品	65.
輸 入	マツチ	411.
	石炭	464.
	寒天	170.
	總額	18,879.
	砂糖	12,758.
	礦油	4,772.
	棉花	243.
輸 入	生ゴム	142.
	貝殼	86.

日本對タイ國主要商品貿易額
(明治四十三年)

輸 出	總額	533.千円
	綿織物	7.2
	絹織物	232.
	綿タオル	13.
	綿メリヤス	21.
	綿縮製品	18.
	靴	44.
輸 入	ランプ及同部分品	37.8
	總額	2,635.
	米	1,950.
	棉花	68.3
	チ一キ材	491.9
	象牙	19.
	故亞鉛	14.

日本對比島主要商品貿易額
(明治四十三年)

輸 出	總額	4,410.千円
	綿織物	769.
	絹織物	54.
	綿メリヤス	227.
	綿織物	560.
	石炭	1,067.
	玉葱	161.
輸 入	馬鈴薯	321.
	總額	778.
	麻類	690.
	繩索	19.
	貝殼	3.
	砂糖	29.
	砂	

日本對海峽植民地主要商品貿易額
(明治四十三年)

輸 出	總額	6,549.千円
	綿織物	254.
	絹織物	339.
	綿タオル	114.9
	綿メリヤス	113.
	陶磁器	77.
	人カ車	116.
輸 入	洋傘	296.
	マツチ	211.
	石炭	1,252.
	錫炭	1,994.
	總額	193.
	棉花	4,615.
	生ゴム	1,165.
輸 入	生藤	1,246.
	貝殼	92.
	亞皮	243.
	皮革	1,096.
	鉛類	37.
	糖類	132.
	砂	

たのは、人の知る通り第一次世界大戰以後である。第二に後に輸出品中の大宗となつた綿製品の比重が極めて小である。支那とは異つて歐洲諸列強の純粹植民地である南洋は、佛印のやうに本國との間に關稅同化制度の如き極端な特惠制度をとる場合は勿論のこと、自由港たる海峽植民地、或ひは自由貿易政策をとる蘭印に於てすら本國との關係が最も密接であつたためである。日本綿製品の市場としての本格的な意味を持ち初めるのは、第一次大戰によつてそれら植民地と本國との關係が遮斷されて以後である。

二 展 開 期

第一次世界大戰がわが國産業の發展に對し如何に大きな力として働いたかは、こゝで改めて述べるまでもなく周知の通りである。明治二十年代から三十年代にかけて確立をみたわが國經濟は、第一次大戰を契機として米國を除く先進諸外國が戰禍にまき込まれ、生産力の破壊と市場の喪失に悩みつゝある間に、大いなる展開を遂げることが出來た。絹業三分化行程の主導者である製糸業は、主要輸出國アメリカの繁榮に刺戟されて著しい發展を遂げ、その間片倉・郡是等の大資本による獨占の強化が行はれた。戰前既に輸出品に於ては機械糸による坐繰糸の驅逐が行はれてゐたが、大戰を契機としてこの傾向は内地物にまで及んだ。このことは絹織物業に於ける力織機の普及に相關聯するのであるが、この時期に於て舊來の手織機は激減した。綿糸紡績業も大戰中未曾有の好況を呈し、その生産額を急増したが、それは同時に太番手糸より細番手糸への轉化を伴つてゐた。綿布生産に於てもそれに併行して粗布より細糸布への轉化が行はれた。紡績兼營の織布が内地向の小巾物と輸出向廣巾物の並行

操業から、輸出向廣巾物へ主力を注ぎ始めたのは注目される必要があらうし、更らに注意すべきは電氣動力の普及と共に、地方機業の力織機化が行はれ、それが輸出産業として再編成されたことである。大戦後の不況時に於ける綿加工業者の綿糸輸入關稅徹廢運動は、大戦中の好況とそれに伴ふこのやうな編成替に原因が見出されねばならぬ。消費資料生産部門に比して著しい遅れを示してゐた生産手段生産部門はこの時期に於て漸くその地位を確立することができ、自給と更らに進んでは後進諸國への輸出の展望を得ることが出來た。勿論眞の自給の實現はほど遠いことであり、大戦後の不況期に於て例へば大正十年に於ける鐵鋼關稅の引上と製鐵業獎勵法の擴張の如き廣範な保護政策を必要としたが、何れにせよ大戦中の輸入杜絶によつてその展望を得たことは注意される必要がある。かうして日本經濟は第一次大戦を契機として大いなる展開を遂げることが出來たのであるが、それは決してわが國産業がよつて立つ基礎的規定を解消するものではなかつた。大戦中に於ける好況は、多くは堅實な生産力の發展を伴ふと云ふよりはむしろ思惑的なものであつたし、織物業に於けるやうに新なる技術の採用を伴ふ場合にも、それは本來の機構の上になされたものであつた。力織機による手織機の凌駕は舊來の農家副業を專業化したけれども、それらの輸出向中小工業は依然輸出大資本と舊來の商業資本の産業資本化した産地大規模工場の下に立たされたのである。大戦中に於ける輸出の伸張がわが國農村とそれに基礎をおく低勞銀に依存してゐたことは變りない。

大部分がアメリカ合衆國の需要に依存する生絲貿易は別として、輸出綿製品の新なる市場と他ならぬ南洋であつた。一方では支那民族資本（とりわけ紡績業）の勃興によつて支那市場の相對的な地位が低下したこと、他

日本の對南洋輸出

	佛印	タイ國	海峽植民地	蘭印	比島	合計	亞細亞	南亞 %	世界	南亞 %
大正5	1,869	2,111	18,418	17,418	11,490	51,346	505,486	10.15	1,127,468	4.55
大正6	3,766	2,207	28,023	36,245	16,868	87,109	704,111	12.37	1,603,005	5.43
大正7	10,030	6,076	42,208	71,676	23,500	153,490	935,550	16.40	1,962,100	7.74
大正8	1,536	3,395	29,844	57,354	18,556	110,685	955,005	11.59	2,098,872	5.27
大正9	3,444	4,200	35,749	107,225	34,376	184,994	998,373	18.53	1,948,394	9.49

日本經濟と南洋貿易

日本の對南洋輸入

	佛印	タイ國	海峽植民地	蘭印	比島	合計	亞細亞	南亞 %	世界	南亞 %
大正5	6,063	2,949	10,737	14,228	9,466	43,443	368,289	11.79	756,427	5.74
大正6	7,295	4,352	15,050	17,333	15,334	59,364	475,515	12.48	1,035,811	5.73
大正7	55,407	5,730	29,323	48,837	17,438	156,735	812,712	19.28	1,668,143	9.39
大正8	124,124	29,937	28,209	65,527	15,530	263,327	1,074,375	24.50	2,173,459	12.11
大正9	20,618	3,245	17,137	68,628	16,404	126,032	942,546	13.37	2,336,174	5.39

第二卷 二三八 第一號 二三八

方では南洋諸植民地の本國が戦争によつて生産力の破壊、船腹の不足を招來したと云ふ二つの理由が重り合つて、わが國綿製品は必然に南洋市場へ流れ込んだ。その他の諸雜品の輸出額も一躍増加し、わが南洋貿易はこゝに初めて工業國對農業國の本來の姿を完備したのである。商品市場としてのみでなく、原料確保の視點から資本輸出の行はれ初めたのもこの時期であり、特に英領マレーの鐵鑛が石原産業によつて大正九年より採掘され初めたことは記憶されねばならぬ。いま大戰の影響が顯著に現はれ初めた大正五年より大正九年に至るわが南洋貿易の大勢を左に見よう。

この時期に入つて南洋貿易は漸く出超を示し初め南洋がわが商品市場としての重要性を示し始めたことを物語つてゐる。輸出が大正九年に最高額を示してゐるのに對し、輸入が大正八年に最高額を示して

1) 日本貿易精覽より作製。

日本對佛印主要商品貿易額
(大正九年)

輸出	總額	3,444	千円
	綿織物	769	
	絹織物	149	
	石炭タール及瀝青	131	
	石炭	878	
輸入	總額	20,618	
	米及穀	14,438	
	食鹽	1,006	
	石炭	4,703	

ゐるのは、既にこの時期に始まつた戦後不況のため輸入の手控へられたによるものと考へられる。この兩年を各々例にとつてみると大正九年に於けるわが南洋輸出は亞細亞輸出の一八・五三%、世界輸出の九・四九%を占めて居り、明治末期の割合が各々八・八六%、三・三九%であつたのに較べ約三倍その相對的地位を高めてゐることが解る。大正八年に於ける南洋輸入は亞細亞輸入の二四・五〇%、世界輸入の一・一一%であつて、明治末期の一四・四一%及び九・〇四%と比較すると、輸入に於ける伸張は輸出に於けるそれほど大でなく、これは入超が出超に轉じたことを物語つてゐる。更らに大正九年を例にとつて、貿易の構成商品の變化を見やう。²⁾

右の表を通觀するならばこの時期に於けるわが南洋貿易が單に量的な飛躍を行つたのみでなく、同時に質的な發展を行つてゐることが看取される。即ち明治年代に未だ重商輸出品中かなりの地位を占めてゐた原始生産物が全くその姿を消して、微々たる地位を保つにすぎざるに至り、輸出の殆んど全部が工業製品によつて占められ、こゝに工業國對農業國貿易の姿が整へられたのである。輸出市場としての意義が強化されるにつれ、綿製品の比重が急速に高まり、蘭印の如き輸出總額中の過半數を占めるに至つてゐる。輸入品の構

2) 大藏省：外國貿易年表より作製。

日本對蘭印主要商品貿易額
(大正九年)

輸 出	總額	107,225千円
	綿織物	60,457
	絹織物	904
	綿メリヤス	1,149
	ビール	1,046
	絹帶その他藥材	4,204
	マツチ	4,630
	石炭	1,459
	セメント	3,996
	陶磁器	3,297
輸 入	ゴムタイヤ	3,373
	箱板	1,037
	總額	68,628
	砂糖	50,333
	礦油	7,970
入	パラフィンワックス	2,549
	錫	1,922

日本對タイ國主要商品貿易額
(大正九年)

輸 出	總額	4,200千円
	綿織物	1,357
	絹織物	52
	綿ブランケット	110
	紙類	402
輸 入	絶縁電線	117
	總額	3,245
	米及粳	1,550
	牛皮及水牛皮	256
	柴檀類	209
入	チーキ	928

日本經濟と南洋貿易

日本對比島主要商品貿易額
(大正九年)

輸 出	總額	34,376千円
	綿織物	7,043
	綿織糸	1,642
	絹織物	652
	綿メリヤス	3,112
	マツチ	678
	石炭	6,676
	セメント	3,248
	陶磁器	825
輸 入	總額	16,404
	砂糖	7,533
	煙草類	824
	麻類	6,214
	油糟	949

日本對海峽植民地主要商品貿易額
(大正九年)

輸 出	總額	35,749千円
	綿織物	6,929
	絹織物	681
	綿ブランケット	322
	綿タオル	348
	綿メリヤス	504
	マツチ	1,776
	紙類	459
	陶磁器	1,116
	ゴムタイヤ	1,698
輸 入	セメント	571
	珐瑯鐵器	421
	炭板	7,866
	石箱	3,090
	總額	17,137
輸 入	生ゴム	8,852
	棉花	1,145
	錫	3,863

第二卷 二四〇 第一號 二四〇

成は殆んど不動であり、依然食料品・原料品がその總てである。

三 世界恐慌とその回復期

第一次大戦中未曾有の膨張を遂げた日本經濟の行く手には、大戦の終息と共に深刻な不況が待ち受けて居た。そしてこの勢は昭和五年を中心とする世界恐慌の時期にまで連なる。日本經濟はこの危機を合理化―勞銀の切下と保護政策とによつて切開きつゝ昭和七年以後の新なる展開に備へやうとしたのである。大戦中米國の好況によつて躍進した製糸業は大正八年を頂上として下向期に向ひ、その後米國の繁榮によつて立直りを示したが、昭和四年の世界恐慌勃發と共に決定的な不況に陥つた。生糸輸出額が昭和四年の七億八千四百萬圓から昭和五年の四億千六百六十四萬圓に激減したと云ふ數字を見ただけでも、製糸業が如何に大きな不況に悩んだかが理解される。製糸大資本家の養蠶家支配を合理化した『特約取引』が導入され、製糸業自體に於ても勞銀の切下げと不拂が不況を克服する手段として採用された。絹織物業に於ても大戦中の好況によつて工場化、動力化が行はれてゐるため、恐慌の打撃は直接的であつた。絹織物業はこの危機をより安價なる人絹織物に轉換することによつて切りぬけやうと努力した。昭和五年以後絹織物に代つて人絹織物が貿易統計中主要な地位を占め初めたのは、一般的恐慌と内的な聯關をもつてゐる。綿糸紡績業はその原料を世界市場に仰ぎ、その製品が世界商品であるだけに世界經濟との關聯がより密接であり、それだけに恐慌の悩みもより深刻であり、その打開策はより積極的でなければならなかつた。わが國紡績業はその確立の當初より第一次大戦に至るまでは操短を以て最大の恐慌對策とし

たが、大戰後に於ては操短と共により積極的な合理化的方法をも併せ用ひなければならなかつた。殊に昭和四年以後に於ける合理的經營の進行は、七年以後の新なる躍進に對する素地を與へたと言ふことが出來やう。即ハイドラフト精紡機、シムプレックス精紡機による製造行程の短縮、混打棉機の直結、綴取工程の改善、工場建築、工場内濕度調節、照明の改良等々。綿糸生産行程の短縮は、紡績兼營の織布行程にも影響を與へずにはおかず、自動織機の廣範な採用が行はれた。かゝる合理化は女工一人當りの生産量を増大させ、深夜業の廢止にも拘らず勞働は内包的に強化され、わが國輸出産業の基礎をなす低勞銀は依然として自己を貫徹しつゝ昭和七年以後の新なる展開を準備したのである。第一次大戰中輸出向に編成替された綿織物中小工業が世界恐慌によつて最も大なる打撃を受けたことは見安い道理である。綿工聯が生産調節、共同販賣、輸出検査、取引先指定等を任務として生れたのは昭和三年末であつた。輸出産業として大戰中飛躍を遂げた衣料生産部門が、大戰後市場の狹隘化に悩んだのに對し、大戰中漸く自給への展望を得た生産手段、生産部門の戦後に於ける悩みは、外國産業の回復とその競争であり、謂はば消極的であつた。大正十年に於ける鋼鐵關稅の引上と獎勵法の擴張とはかくして理解することが出来る。

かくして合理化と廣範な保護政策とにより、第一次大戰後の不況並に世界恐慌に對處しつゝ、日本經濟は新なる展開に備へたのであるが、その時期は昭和六年の金輸出再禁止以後に到來した。再禁止による爲替安を利用してわが國商品が各方面に進出したことはわれわれの記憶に新しい。とりわけ昭和六年排日運動の激化によつて支那貿易の相對的地位が低下したため、それに反比例して南洋市場の重要性は増加したと言ふことが出來やう。

輸出入共激増してゐるが、輸出の伸張ことに甚しく、恐慌中入超を續けた南洋貿易はこゝに出超を示すに至り、商品市場としての重要性を増加した。安價な日本品は未だ農業恐慌の打撃からぬけ切れず、購買力の不足に悩む南洋地方住民に好適であり、その結果歐洲本國の競争を一步一步打負して行つた。また單に歐洲本國の既得市場を蠶食したのみに止まらず、歐洲産業の持ちえなかつた新なる市場の開拓にも成功した。人絹製品・諸雜貨等が

日本の對南洋輸出

	佛 印	タイ國	海峽植民地	蘭 印	ヒリツピン	英領ボルネオ	合 計	亞細亞	南亞 %	世 界	南亞 %
昭 4	2,695	10,633	27,928	87,125	30,596	9	158,977	915,232	17.37	2,148,618	7.39
昭 5	2,412	9,476	26,930	66,047	28,369	92	133,326	704,030	18.93	1,469,852	9.07
昭 6	1,709	4,721	19,119	63,450	20,425	53	109,477	505,018	21.67	1,146,981	9.54
昭 7	2,343	8,581	25,549	100,251	22,362	51	159,157	677,613	23.48	1,409,991	11.28
昭 8	3,680	18,124	46,133	157,487	24,050	137	249,611	930,636	26.82	1,861,045	13.41

日本の對南洋輸入

	佛 印	タイ國	海峽植民地	蘭 印	比 島	英領ボルネオ	合 計	亞細亞	南亞 %	世 界	南亞 %
昭 4	9,590	20,811	41,634	77,345	18,044	—	167,424	857,953	19.51	2,216,238	7.55
昭 5	7,907	18,843	28,925	59,983	10,759	4,509	130,926	632,459	20.70	1,546,070	8.46
昭 6	6,380	6,792	21,857	46,080	8,987	3,096	93,192	463,952	18.86	1,235,672	7.54
昭 7	5,691	11,197	25,337	40,409	9,764	3,622	96,020	450,910	21.29	1,431,461	5.70
昭 8	9,909	12,255	38,771	55,709	14,185	5,771	136,600	658,557	20.74	1,917,219	7.12

それである。かくの如き

日本經濟の進出は歐洲諸本國をして必然的に對抗手段をとらしむるに至り、更にそれに對處するたためにわが國に於ても廣範な貿易統制を必要とするに至つた。七年七月の資本逃避防止法、八年二月の外國爲替管理法と共に、大正十四年三月三十日の輸出組合法が新に改正さ

れて意味を持ち始めたのもこの時期である。左に恐慌前後に於ける南洋貿易の大勢を見やう。¹⁾

昭和六年の金輸出再禁止による圓貨の下落は、それ以後に於ける金額の絶對數を、それ以前のものとそのまま比較することゝ無意味ならしめてゐるけれども、單に相對的地位のみについてみて大正九年のわが南洋輸出が亞細亞輸出の一八・五三%、世界輸出の九・四九%であつたものが、昭和八年の南洋輸出は亞細亞輸出の二六・八二%、世界輸出の一三・四一%を示し、わが國に於ける南洋輸出の地位が著しく高まつたことを物語つてゐる。輸入は亞細亞輸入の二〇・七四%、世界輸入の七・一二%であり、大正八年と比較すると却てその相對的地位を低下してゐるが、これはこの時期に於て南洋の商品市場としての地位が原料供給地としてよりも更に高まつたことの證左であらう。次に各國別についての貿易構成を見やう。²⁾

日本對佛印主要商品貿易額
(昭和八年)

輸 出	總額	3,680千円
	綿織物	90
	絹織物	832
	人絹織物	137
	陶磁器	144
	石炭	109
	コークス及ピッチ	202
輸 入	箱板	152
	總額	9,909
	鹽	787
	生ゴム	1,043
	松脂	109
	漆	790
	石炭	6,037
	亞鉛	353

日本對海峽植民地主要商品貿易額
(昭和八年)

輸 出	總額	46,133千円
	綿織物	17,608
	絹織物	1,129
	人絹織物	3,294
	綿織品	771
	車輛及同部分品	2,793
	鐵製品	1,187
	陶磁器	900
	罐詰食品	513
	履物	627
	硝子及同製品	618
	木材	703
	水産物	893
	石炭	2,183
	蔬菜	515
輸 入	總額	38,771
	生ゴム	20,499
	錫	5,330
	鐵礦油	8,820
	破油	228

1) 日本貿易精覽より作製。

2) 三菱經濟研究所：日本の産業と貿易の發展より引用。

日本對比島主要商品貿易額
(昭和八年)

輸 出	總 額	24,050千円
	綿 織 物	6,780
	絹 織 物	86
	人 絹 織 物	971
	メリヤス 製品	2,671
	石 炭	1,632
	蔬 菜	815
	罐 頭 詰 食 料 品	304
	鐵 製 品	932
	總 額	14,185
輸 入	麻 類	8,864
	木 材	2,512
	煙 草	591
	採 油 用 原 料	782

日本對英ボルネオ主要商品貿易額
(昭和八年)

輸出	總 額	137千円
輸 入	總 額	5,771
	礦 油	4,634
	阿仙藥其の他タ ンニン越幾斯	230
	生 ゴ ム	46
	木 材	841

日本對タイ國主要商品貿易額
(昭和八年)

輸 出	總 額	18,124千円
	綿 織 物	6,767
	人 絹 織 物	850
	鐵 製 品	1,190
	綿 プランケット	985
	鐵	441
	紙 類	455
	硝子及同製品	399
	自轉車及同附屬品	326
	綿メリヤス製品	530
輸 入	履 物	312
	總 額	12,256
	米	10,882
	木 材	1,240

日本對蘭印主要商品貿易額
(昭和八年)

輸 出	總 額	157,487千円
	綿 織 物	78,273
	絹 織 物	919
	人 絹 織 物	14,973
	メリヤス 製品	4,235
	車輻及同部分品	6,456
	鐵 製 品	4,366
	陶 磁 器	3,729
	硝子及同製品	2,069
	綿 織 糸	1,236
輸 入	鐵 製 品	1,389
	毛 織 物	568
	罐 頭 詰 食 料 品	1,213
	履 物	1,980
	ランプ及同部分品	1,707
	ワイシヤ	1,104
	木 材	1,265
	靴	1,924
	總 額	55,709
	礦 生 ゴ	21,820
輸 入	砂 糖	7,269
	木 材	12,621
	採 油 用 原 料	1,610
	屑 及 故 鐵	2,249
		1,045

第一次大戰中に獲得した南洋に於けるわが國の地位は、歐洲諸本國産業の戦後に於ける復活にも拘らず大體に於てそのまゝ維持せられいまや南洋諸地方は本國に對して植民地的役割を果すと同時にわが國にとつても原料の供給地、製品の需要地として不可分の關係に立つに至つた。日本の對南洋輸出品中最も重要な地位を占むるものは依然として衣料製品であるが、特にこの時期に於ては人絹製品の進出が目立つてゐる。更らに注意すべきことは、纖維製品に次いで車輛類、鐵製品が登場し初めたことで、鋼材・機械等も急増の勢を示して來た。即ち大正十年以來の保護獎勵の結果わが國生産手段生産部門も漸く輸出産業としての意味を持ち初めて來たのである。その確立以來常に輸出産業の大宗としての地位を保ち續けて來たわが國衣料生産部門は漸く飽和状態に達し、殊に支那・英印等後進諸國の民族資本の勃興があつてみれば、日本經濟の今後の進路は自ら生産手段生産部門へ向はざるをえず、未だ極めて輕微ではあるが、その傾向が見え始めたものと言へやう。輸入品の中心を形成するものが原料品・食料品である點變りがないが、米の輸入が減少したのは、昭和三年米及粳の輸入制限が行はれ、更らに昭和五年輸入税が二圓に引上げられたのによる。更らに減少したものとしては砂糖が挙げられるがそれは日本糖業が大體この時期に自給の状態に達したためである。輸入品中最重要なものは英領マレー・蘭印の供給にかゝる生ゴムで、それに次いで鐵油類が挙げられる。英領ボルネオが貿易統計に現はれるのは昭和五年以後であるが、その大部分はわが國の鐵油輸入であり、蘭領印度に次いで重要な地位を占め初めた。英領マレーの鐵礦もわが國生産手段生産部門の原料として確固たる地位を占むるに至つてゐる。

更らに各地域別について簡単な素描を行ふならば、先づ佛印であるが對佛印貿易はその發端以來終始一貫不振

3) 前掲：日本の産業と貿易の發展。淺香未起：南洋經濟研究。樋口弘：南洋に於ける日本の投資と貿易。

を續け、南洋の他の方面に於ける貿易が確固たる地位を占むるに至つたこの時期にあつても未だ微々たる地位を占むるにすぎない。わが國は永きに亘つて佛印と無條約状態にあつたため、高率の一般稅率を適用され、高度の特惠（同化關稅）に惠まれた佛本國商品に食込む餘地が無かつたのである。昭和七年佛印に關する協定が行はれ、稅率は若干緩和されたが、一般的傾向を變更するほどのものではなかつた。貿易商品の構成を見ると、わが國よりの輸出は各項目とも平均して微量であり、最高額の絹織物が僅かに八三萬二千圓を占むるにすぎない。綿織品が禁止的な高率關稅の下に置かれてゐるのが、對佛印輸出不振の最大原因と見られる。輸入品中では石炭が第一位を占め總額の大半を數へ、ゴム・漆・鹽がこれに次いでゐる。

タイ國は南洋中唯一の獨立國であるが、經濟的には英國の壓力強く、一八五六年の對英條約以來關稅自主權を拘束されて居り、一九二七年（昭和二年）の關稅法實施により自主權を確立したけれども、英國の實權は依然として強く、その取引先も新嘉坡・彼南・香港等の英領が壓倒的地位を占めてゐた。その間、日本は漸次擡頭し、昭和八年に於て輸入では香港・新嘉坡・彼南・西印度及び英領印度に次いで第六位であるが輸出に於ては首位を占むるに至つた。輸出品の主なるものは、綿織物・人絹織物・綿ブランケット等の衣料品であるが、鐵及鐵製品等生産手段部門の製品が漸次増加しつゝあるのは注目し得る。輸入品では從來常に首位を占めてゐた米が昭和三年以來の制限策によつて漸減の傾向にあり、それについて木材が問題になつてゐる。

この時期に至るまでの貿易統計には、單に海峽植民地が擧げられるに止まつてゐるが、對海峽植民地貿易中には馬來聯邦及非馬來聯邦との貿易額も包含されてゐると見て差支ないやうである。周知のやうに自由貿易港とし

ての傳統をもつ海峽植民地に於てはわが國も制度的な差別待遇を受けることなく、この時期に於けるわが南洋貿易の躍進と共に、わが對海峽植民地貿易も増加を示してゐる。輸出の首位にあるものは言ふまでもなく衣料品であり、特に綿織物は昭和八年對海峽植民地輸出總額中の三八・二%を形成する。人絹織物の進出もこの時期に於ける南洋貿易の一般的例外をなすものでなく、また車輛・鐵製品等生産手段部門の進出も同様である。輸入ではゴムが過半數を占め、これに次いで鑛が數へられるのは、マレーに於ける日本投資による鐵鑛業の產物である。

蘭印貿易はわが國南洋貿易中最重要な地位を占むるに至り、昭和八年をとると輸出に於てはその半以上に、輸入に於ては半近くに達してゐる。蘭印の貿易政策は自由貿易的であり、關稅定率上本國と第三國との間に區別を設けなかつた。これは植民地貿易政策としては稀有のことであり、一見奇異に感ぜられるが、和蘭本國の經濟力が蘭印の供給する原料品・食料品を吸収し得ず、また蘭印の需要する工業製品を與へるには餘りに小さすぎると云ふ特殊事情から説明せられる。かゝる門戶開放主義の故にその後の日本品の進出に對し和蘭本國の工業保護のために、關稅引上よりも直接的な輸入制限策に依らねばならなかつたのであるが、この時期に至るまでは傳統的に自由貿易的であり、それに乘じて低勞銀と圓安による日本商品の進出著しく、昭和七年には終に和蘭本國を抜いて第一位を占むるに至つた。これに對し輸入に於ては和蘭・新嘉坡・米國・英國・英領印度について第六位を占むるにすぎない。貿易構成を見ると、輸出の主流をなすものは衣料品であり、なかでも綿織物が大半を占め人絹織物がこれに次いで居り、世界恐慌以後に於ける人絹製品の出出は著しい。その他メリヤス製品・織物系・毛織物・絹織物等と拾つてみると衣料品市場としての感が壓倒的である。しかし陶磁・ガラス製品等雜品の増勢

も無視され難く、就中、車輛・鐵製品等生産手段部門製品の進出は、以後に於ける日本經濟の展望にとり重要である。勿論鐵製品中の主要なるものが琺瑯鐵器であり、機械類に於ては和蘭・米國・獨逸・英國の下位に立つが何れにせよこの方面へ進出し始めたとは注目されて良いことである。輸入品中重要なものは、重油及び原油をも含んだ鑛油であり、昭和八年輸入總額中の三九・一%を占めて居る。第二位を占むる砂糖は日本糖業の自給達成につれて漸減の傾向にあり、それに代つて生ゴムの進出が目立つ。總じてこの時期に於けるわが蘭印貿易は壓倒的に出超であり、和蘭當局は本國工業保護のため終に傳統の門戸開放主義を一擲し、昭和八年九月五日非常時輸入制限令を公布し、直接的統制に乗出したのである。

比島は米本國との間に特惠的な關係をもち、無稅自由貿易を行つてゐるため、米國は對比輸出中の六割五分、對比輸入中の八割を占め、残りの僅小部分を他國で分け合つてゐるにすぎないが、わが國は米國に次いで第二位に位する。わが對南洋貿易中でも海峽植民地に次いで第三番目に重要である。輸出品中では衣料品が最重要であること他の諸地域と變りなく總額中の約半を占め、石炭・鐵製品・蔬菜等これに次ぐ、輸入品中では麻類が總額中の六・二四%を占めて第一位にあり、木材・採油用原料・煙草等がそれに續いてゐる。南洋貿易のすべてについて妥當するやうに、こゝに於ても輸出品の構成が複雑であるに對して購入品の構成は單純である。

英領ボルネオが昭和五年以來貿易統計中に現はれてゐるが、輸入品の大部を占むる鑛油以外問題となるやうな項目は見出されない。

四 戰時經濟期

昭和六年の金輸出再禁止以後に於けるわが國の好況は決して滑らかな道を歩んだものではなかつた。低勞銀と爲替安とを武器として恐慌の底から立上らうとするわが國の努力は、同じく恐慌に悩む諸外國の對抗手段によつて至る所障礙に遭遇したのである。世界恐慌を契機として世界のすべての國が或ひは關稅障壁を高め、或ひは直接的干渉手段を採用することによつてわが國の進路を阻んだことは今なほわれわれの記憶に新しい。わが國經濟にとつて最も關係の深かつた英米諸國及びその屬領についてみても、前者は昭和六年（一九三二）金本位を離脱し翌昭和七年（一九三三）にはオックスワ會議の開催によつてブロック經濟の形成に向つてゐるし、後者は昭和五年（一九三〇）關稅の引上（ホウレイ・スミート關稅）を行ひ、更らに昭和八年（一九三三年）には金本位の離脱を敢行してゐる。昭和七年以後に以ける日本經濟の展開はかゝる還境のうちでなされたのである。が、諸列強のブロック經濟形成はわが國をして必然に東亞共榮圈の形成に向はしめた。ところがわが國經濟のかゝる努力は、支那の排日・抗日運動によつて阻まれ、終に滿洲事變の勃發を見るに至つた。日本經濟はそこから謂はゆる準戰時體制に入り、昭和七年以後に於ける好況は人の言ふやうにまこと『硝煙の臭濃き』ものだつたのである。滿洲事變は一應落着いたかに見えただけども、其後も排日・抗日運動は依然繼續され、かくてわれわれは昭和十一年と云ふ年を迎へた。昭和十一年は支那にとつて未曾有の好況の年であつた。農村の繁榮は農民購買力の上昇となり、農民購買力の上昇は民族資本の繁榮をもたらしした。しかしこの好況は蔣政權の自給政策の故に支那の外國貿易には決

して好轉をもたらすものではなかつた。とりわけ經濟的繁榮を背景とする支那民族運動の直接の對照とされた日本との外國貿易に對してさうであつた。第一次大戰勃發の前年に於けるわが對支輸出は輸出總額の二四・五%に達してゐたものが、世界恐慌發生の昭和四年には一六・一%に減少して居り、更らに昭和十一年には六%と云ふ僅少の數字を示すに至つてゐる。支那の抗日運動は東亞共榮圈の形成を阻み、昭和十二年七月われわれの忘れることはざる支那事變は勃發した。

支那事變の勃發と共にわが國經濟は準戰時體制から戰時體制に突入し、大いなる轉回を遂げねばならなかつた。國民經濟の物資はあげて國民的・戰爭目的のために動員されねばならず、而も從來個人的資本の利潤追求を通じてなされてゐたこれら國民經濟の素材填補は直接的な統制の下におかれなくてはならなかつた。廣範な物動計畫が登場し、貿易部面に於て輸出入物資に直接の統制を加へる輸出入臨時措置法が公布されたのは劃期的であつたと云つて良からう。これによつて不急不要物資の輸入は禁壓せられ、輸入は軍需資材が中心となり、その他には輸出入原料資材と求償貿易相手國よりの特殊輸入の外は全然許可されないと云ふ方針が決定されたのである。しかしこのことは當時屢々誤解され、その誤解からする不幸な論争を生むに至つたやうに、決して從來の機構を根本的に變更するものではなかつた。なるほど國民經濟の素材填補が個々の業者の自由なる利潤追求の活動に委ねられることを止めた點に於ては大いなる轉回であつたけれども、國民的目的・戰爭目的に離反せざる限り、に於て從來の機構は進んで利用されさへしたのである。軍需資材及びそれに伴ふ生産手段の自給確保は窮極の目標であるにはあるが、未だ輸入に俟たねばならず、軍需資材の輸入のためには、衣料製品の輸出振興が依然要求

せられた。而も衣料品の輸出振興は軍需資材の輸入激増に伴ふ原料品の手當難の下に於てなされねばならないのである。かゝる要求に答へるため從來の機構を利用し、且つ強化して出現したものが輸出入リンク制であらう。昭和十三年以後、多くの輸出製品とその輸入原料との間に相次いでリンク制が設けられたのであるが、なかでも主要なのは昭和十三年七月一日より實施された綿業リンク制及び、同年八月一日以降に人絹糸・人絹織物・人絹雑品について各々採用された人絹工業リンク制である。前者は地方の輸出向中小織物業者を地方問屋資本の支配下から解放し直接紡績資本の下に立たしむることによつて從來の階層的な支配關係を單純化し強化したものであつたし、後者も同様に地方問屋資本を排除し、人絹資本の下に賃織關係を通じて地方中小機業を組織化したものに他ならなかつた。

かゝる體制を以てわが國は支那事變に突入したのであるが、いまや事態の進行と共に支那經濟が東亞共榮圈のうちに一步一步組入れられつゝあるとき、南洋貿易はどのやうな地位を占めたであらうか。先づ全般的な數字を見やう。¹⁾

日本の對南洋輸出

	佛印	タイ國	海峽植民地	英マレー	蘭印	比島	英ボルネオ	合計	西印度	南：亞 %	世界	南：世 %
昭11	4,697 ^{千円}	43,028	58,770	2,441	129,495	51,840	536	290,807	1,370,969	21.21	2,692,975	10.79
昭12	4,623	49,381	67,432	3,865	200,050	60,348	1,040	386,739	1,645,914	23.49	3,175,418	12.17
昭13	3,082	39,269	20,696	2,181	104,145	32,539	950	202,922	1,664,625	12.19	2,689,677	7.54

1) 大藏省：大日本外國貿易年表より作製。

日本の對南洋輸入

	佛印	タイ國	海峽植民地	英マレー	蘭印	比島	英ボルネオ	合計	亞細亞	南：亞 %	世界	南：世 %
昭11	20,154	8,753	41,174	39,125	113,545	36,266	15,753	274,770	1,060,189	25.91	2,763,681	9.94
昭12	27,011	13,570	67,795	47,795	153,450	45,193	18,775	373,589	1,295,114	28.84	3,783,177	9.87
昭13	20,301	4,951	54,167	46,801	88,249	35,630	13,832	263,931	1,023,532	25.78	2,663,437	9.90

支那事變は昭和十二年七月に勃發してゐるが、その十二年と翌十三年とを比較してみると、わが南洋輸出は約半減してゐることが解る。單に絶對量に於いて減少したのみでなく、世界輸出總額に對する%が十二・一七から七・五四に減少した點をみると、支那事變の勃發によつてわが南洋貿易は極めて困難な事態に遭遇しつゝあつたものと云はねばならぬ。それは軍需資材輸入の増加、從つて輸出品原材料の手當難と云ふ一般的原因にもよるが、特殊的には南洋諸植民地の本國が大部分英米等わが國の敵性國家であり、その敵性の故に政治的な制限政策が加重されつゝあつたことに主要な原因が見出される。輸入について見ると同じく減少を示してはゐるが、その割合は輸出に比して小である。世界輸入總額に對する%に於ては九・八七から却て九・九〇に増加さへ示してゐるのであり、昭和十二年に於ける出超は昭和十三年に入つて入超に轉じてゐる。日本戰時經濟の進行と共に南洋が商品市場としてよりも軍需資材の獲得地としての意味を濃くしたものと考へられるが、しかしより詳しくは各國別の貿易構成を觀察せねばならぬ。

日本對佛印主要商品貿易額

		昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
輸 出	總額	4,697千円	4,623	3,081
	綿織物	11	16	12
	絹織物	566	916	200
	織物	6	7	4
	磁器	267	229	127
	炭	119	80	234
	銅板	170	274	—
	及	253	508	373
	馬鈴薯	141	162	—
	アルト	128	194	—
輸 入	總額	20,154	27,011	20,301
	米	196	204	5
	鹽	1,153	1,065	1,548
	生皮	117	110	14
	松脂	4,272	8,370	1,364
	漆	103	139	173
	炭	1,102	1,580	1,333
	亞鉛	11,656	12,831	12,107
	—	—	—	—
	—	—	—	—

日本經濟と南洋出易

日本對タイ國主要商品貿易額

		昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
輸 出	總額	43,028千円	49,382	39,269
	綿織物	13,600	16,026	14,905
	絹織物	191	191	66
	織物	4,435	3,515	1,568
	鐵製品	1,534	912	258
	襪	1,086	944	502
	紙類	854	1,151	623
	硝子及同製品及陶磁器	1,035	1,033	422
	自轉車及同附屬品	411	388	128
	綿メリヤス製品	465	392	59
輸 入	履物	513	382	88
	總額	8,753	13,570	4,951
	米	4,831	3,756	2,799
	食鹽	—	215	102
	牛皮及水牛皮	839	3,543	492
	生皮	543	1,454	67
	木	1,771	3,111	1,190
	—	—	—	—
	—	—	—	—
	—	—	—	—

第二卷 二五四 第一號 二五四

日本對海峽植民地主要商品貿易額

		昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
輸 出	總 額	58,770千円	67,432	20,696
	綿 織 物	9,169	11,587	5,055
	絹 織 物	3,571	4,572	1,121
	人 絹 織 物	2,843	3,627	2,207
	メ リ ヤ ス 製 品	1,192	1,126	563
	石 炭	2,806	3,388	1,947
	車 輛 及 同 部 分 品	2,681	3,037	172
	鐵 製 品	1,642	1,557	187
	陶磁器及ガラス製品	1,946	2,511	566
	罐 詰 食 料 品	1,362	1,832	381
	履 物	813	990	185
	水 産 物	2,740	2,240	138
	蔬 菜	799	782	251
	總 額	41,174	67,795	54,167
輸 入	生 ゴ ム	23,661	41,566	25,183
	鑽 及 金 屬	9,861	17,296	23,334

日本對英領マレー主要商品貿易額

		昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
輸 出	總 額	2,441千円	3,865	2,181
	綿 織 物	319	330	153
	絹 織 物	312	411	60
	人 絹 織 物	46	122	59
	罐 詰 食 料 品	142	187	59
	鐵道客車及同部分品	11	361	400
	鐵 道 機 關 車	2	167	—
輸 入	總 額	39,125	47,795	46,801
	生 ゴ ム	19,386	18,144	10,700
	鑽 及 金 屬	19,364	30,523	36,039

日本經濟と南洋貿易

		昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
輸 出	總額	129,495千円	200,052	104,145
	綿織物	55,346	85,577	39,485
	絹織物	1,086	1,142	627
	人絹織物	11,627	11,486	7,202
	メリヤス織物	4,072	7,153	5,702
	車輛及同部分	4,577	6,477	2,606
	鐵製物品	4,169	7,761	2,172
	陶磁器及硝子製品	4,594	6,544	5,340
	綿織物	6,563	16,375	7,789
	鐵及織金屬	6,133	7,976	4,332
	罐詰食料	1,696	2,477	1,727
	履及同部分	1,068	1,658	712
	ランプ及同部分	1,117	1,793	—
	ワイシヤ	1,021	1,671	691
輸 入	木材	1,079	1,684	1,620
	玩具	954	1,125	499
	紡織	179	506	121
	織布	193	932	670
	總額	113,545	153,450	88,249
	油脂蠟及同製品	44,688	65,296	44,387
	生ゴム	22,878	25,774	12,080
	砂糖	19,766	17,723	5,187
	木及金屬	4,445	6,380	3,651
	鑲計	3,966	10,283	10,057

第二卷 二五六 第一號 二五六

			昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
輸 出	總額	額	51,840千円	60,348	32,599
	綿織物	物	7,661	12,590	6,053
	絹織物	物	209	234	98
	人絹織物	物	8,669	5,494	2,095
	メリヤス製品	品	5,348	4,849	3,888
	石炭	炭	2,448	2,423	1,952
	蔬食料	菜	1,481	1,357	508
	鐵罐詰食料	品	2,405	3,732	1,594
輸 入	鐵製品	品	2,079	2,251	391
	陶磁器及硝子針	品	2,478	3,422	1,757
	總額	額	36,266	45,193	35,630
輸 入	麻類	類	20,676	23,222	11,456
	木煙	材	7,329	11,259	6,907
	煙草	草	747	284	915

日本對英領ボルネオ主要商品貿易額

		昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
輸出	總 額	536千円	1,040	950
輸入	總 額	15,753	18,755	13,832
	油脂蠟及同製品計	9,279	11,969	9,173
	生 ゴ ム	1,282	2,334	1,553
	木 材	4,589	3,709	2,078

日本經濟と南洋貿易

輸出に於て先づ目立つことは、歐洲諸本國の制限政策が漸く力を持ち初めて來たこの段階に於ては、わが國に於ける原料の手當難と云ふ事情も加つて、從來南洋輸出品中の大宗を占めてゐた綿製品が、下り坂に向つたことである。昭和十二年と昭和十三年とを比較するなら何れの地域に於ても減少が示されて居り、これが南洋輸出の減少した最大の原因であると考へられる。それと同時に例へば蘭印に於て土着資本による綿業勃興の萌芽がみられ、紡績機・織布機等生産手段輸出が漸増しつゝあることは注意される必要がある。南洋全般としての工業化はほど遠いことであり、各地域の特殊性は顧慮せられねばならないけれども、何れにせよ南洋の一角に而も最大の綿布市場に民族資本による近代工業が起り初めたことは日本經濟の今後の展望にとり重要である。それはわが國の生産手段部門への重心移行と云ふ視角から大切なことであらうし、さう云つた經濟問題と共に更に廣く南洋地方の民族問題に對しても一つの見透しを與へるものと云はなくてはならぬ。輸入に於ては石油或ひは鐵礦等軍需資材の項目が既に統計項目から姿を消し、前者は油脂蠟及同製品と云ふ項目の中に、後者は鑛及金屬の中に包括されて居り、詳細を知ることが出来ないが、他の諸原料に比し遙かに重要な地位を占めつゝあることは看取出来る。即海峽植民地

では昭和十二年から昭和十三年に入り輸入全般の激減にも拘らず、鑛及金屬なる項目は増加を示して居り、英領マレーについても同様のことと云へる。また蘭印及び英領ボルネオの油脂蠟及同製品なる項目は若干の減少を示しはしてゐるが、輸入品全般の減少に較べればその率は遙かに少く、相對的地位は却て高まつてゐることを示してゐる。

對佛印貿易は昭和七年の通商協定後も改善の徴候なく、更らに昭和九年の佛印關稅率一般改正によつてこの協定自身さへ有名無實となり、爾來日本商品に對する壓迫は加重され續けて第二次世界大戰にまで至つてゐる。昭和十二年から十三年にかけて輸出入とも減少してゐることは前掲表の示す通りである。貿易構成に大した變化はないが、唯鹽の輸入が増加してゐること、石炭が依然重要な地位を占めてゐることは注意さるべきである。

タイ國との間には昭和十二年十二月、日泰友好通商航海條約が締結せられ、友好關係を促進してゐるが、支那事變の影響は輸出入減少を結果してゐる。最近に於ける日泰貿易が日本の出超であり、タイ國は原料供給地としてよりも商品市場としての意味が濃かつたため輸出品原料の手當難と共にそれが減少したことは蓋し止むを得なく。

從來英國製品の獨占市場たる觀があつた英領マレーに於ても、昭和七年以後に於けるわが國商品の進出に對應するため昭和十年五月より織物輸入割當制が實施された。特にこの時期から海峽植民地經由の仲繼貿易より馬來諸州との直接貿易が増加し、この貿易は海峽植民地の自由貿易圈内から逸脱し、輸入關稅制の下におかれたため、漸く飽和狀態に達し、特に昭和十二年の支那事變勃發後は華僑の排日貨の影響を受けて減少せざるをえなかつた。

つた。輸入に於ては鐵礦が軍需資材として不可欠のものであるため、さしたる減少を示さず、ために昭和十一年の出超は昭和十三年に至つて夥しい入超に轉化してゐる。

蘭印が本來自由貿易的政策をとり、本國と第三國とを區別しない輕微な財政關稅を賦課するに止まつたことは既述の通りであるが、昭和七年以後に於ける日本商品の進出は、遂に各方面に於ける制限政策をとるに至らしめた。昭和七年先づ關稅の引上げから着手せられ、關稅の引上げは本國と第三國とを區別しなかつたため、本國特惠の手段としては直接的な貿易統制の方法が採用せられた。昭和八年九月、非常時輸入制限制が公布され、セメント・ビールから出發してその後各種商品の輸入割當制が行はれた。昭和九年の日蘭會商はかくして開催されたのであるが、遂に成功せず制限令は却つて強化されさへした。昭和十二年、石澤ハルト覺書交換によつてやゝ好轉の色が見え、制限令の緩和が約束されたが、同年に勃發した支那事變は再び反轉してその後は惡化の一路を辿つてゐる。昭和十二年と十三年と比較するならば輸出入共約半減してゐることが解るであらう。輸出品の大宗をなすものは依然綿製品を中心とする衣料であるが、既述の通り生産手段の輸出が激増して來たことは見逃せないことである。輸入品では戰時經濟の進行につれ、石油及金屬類の相對的地位が高まつてゐる。

日比貿易は米國の政治的壓力にも拘らず地理的接近と昭和七年以後の圓安に乗じて躍進し、特に綿製品に於ては昭和九年終に米國を凌駕するに至つた。その結果翌十年には日本綿布對比輸出暫定制限協定が行はれ、こゝに於てもまた日本商品の進出は阻れたのである。特に支那事變勃發後に於ける米本國の政治的壓力は倍加され、昭和十二年までの出超は十三年に入つて入超に轉化してゐる。

英領ボルネオとの貿易がわが國の石油輸入を中心としてゐる點變りないが、昭和十二年を境として輸出入とも減少してゐる點は他の地域と同様である。

かゝる勢のうちにわれわれは昭和十四年の第二次世界大戰の勃發を見たわけであるが、それ以後の問題は餘りにわれわれの記憶に新しいことであり、こゝに殊更取上げる必要はないであらう。第一次大戰の經驗を知るものの中には事態の好轉を豫想するものもないではなかつたが、今次大戰は第一次大戰とは異り、事態の好轉を示すどころか、反對に諸本國のわが國への敵性の故に却て惡化の方向を辿りつゝあつたのである。佛本國の敗退後日佛印經濟協定の成立となり、佛印はタイ國と共に東亞共榮圈參加への態勢を示し、兩國間との貿易は舊南方貿易會の統制の下に續けられて行つたが、新に昨年行はれた蘭印との會商は終に決裂の悲運に遭遇せねばならず蘭印は東亞共榮圈不参加の意圖を明らかにした。更らに事態を決定的に惡化せしめたものは英米及びそれに續いて蘭印によつて行はれたわが國資金の凍結であり、それ以後のわが國の南洋貿易は絶望的な状態に入りつゝ昭和十六年十二月十八日の大東亞戰爭勃發にまで至つたわけである。

大東亞戰爭勃發を契機としてわれわれの關心は貿易と云ふやうな狭い分野に局限されることを許さず、更らに廣汎なものへと擴大しつゝあるのであるが、さう云つた廣汎な南方政策の一環としてわが南洋貿易もまた當然に重大な役割を果すものと考へられる。新なる南方貿易の構想がなされるためには、南洋經濟そのものゝ調査が正確に而も急速に行はれることが絶對的に必要であらう。しかしこゝでは主として日本經濟の側からその確立以來の南洋貿易の歴史を素描し、問題への一步の接近を示したにすぎない。